

## 9. 建築物

### 9-2. 家の内部構造

子供の頃の家は段ぶき、草小屋であった。しかし、薪ストーブを焚いていた。壁、床も板張りであった。しゃれていたね。おばあちゃん(父の母、名はノソテカ nosoteka という。父の父はサシカウク sasikauk という人だったが、早く亡くなった)の家は私の家の隣にあり、焚火であった。土間にかやを編んだすだれ(トマ toma)をしいてあった。こういう床の作りをアプッキソ aputkiso という。エロンネ eronne は上座、エウトウンネ eutunne は下座。エロンネ プヤル eronne puyar は上手の窓のこと。小さな家はポンチセ poncise、有力者のいる家は、ポロチセ porocise だ。家には片屋根の差しかけ(モセム môsem)がついていた。おばあちゃんの家にもモセムついていた。おばあちゃんの家にはシントコ sintoko などたくさんあった。おばあちゃんの家にはヌサ nusa (祭壇)はなかったが、ロルンプヤル rorunpuyar (神窓)はついていた。おばあちゃんの家と私の家(本家)は3、4間離れていた。ヌサ nusa と本家は2間位離れていた。

鍋掛けはスワツ suwat という。一本の木を削って、何段か刻みをつけてあった。

火のことはアベ ape。火の神はアペフチ apehuci という。炉の上手に丸太を両隅にいけてあった。神様がやどっているのか、大事にしていた。

[佐伯ハマ氏]

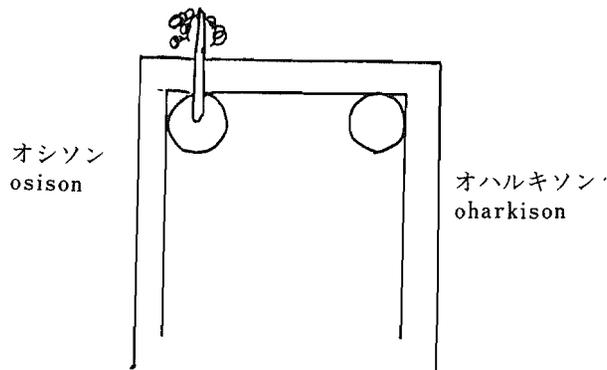


図2. 炉の構造 [佐伯ハマ氏]

### 9-4. 屋外の構造

トイレは男女別。茅でつくってあった。桶をいけてあった。おがみ小屋は女のトイレだが、男のは屋根があったようにおもう。大便是女のこと一緒だったような気がする。おばあちゃんの家にはトイレは一つだけだった。トイレはアシンル asinru という。

[佐伯ハマ氏]

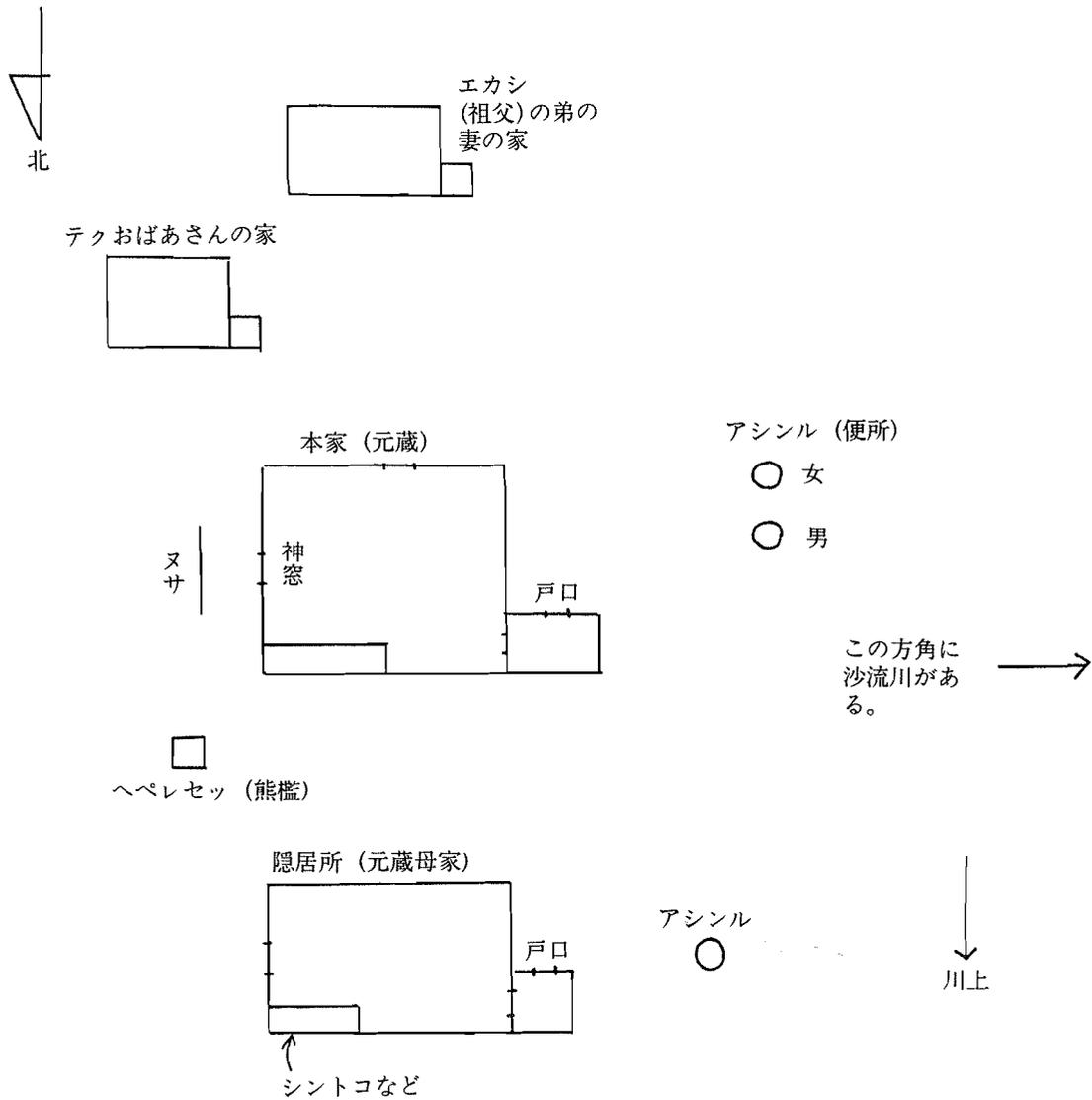


図3. 佐伯氏の子供の頃の家の配置 [佐伯ハマ氏]